次世代に技術で挑む

群馬県産業界

次世代産業の模索相次ぐ

東京都から100キロほど北に位置する群馬県。茨城県と栃木県とともに北関東圏に位置づけられる。人口は約200万人で、利根川をはじめとする豊富な水と雄大な自然に囲まれる。明治時代から繊維産業が栄え、戦前の一大飛行機メーカーの中島飛行機も群馬県で生まれるなど、群馬県は日本の近代化とともにモノづくりの伝統を育んできた。目下、急速に変化する経済情勢の中、群馬県の産業界にも変化の芽が息吹いている。

前橋市市街地から高崎市市街地へと続く。手前は利根川

トヨタ自動車と富士重工業の共同開発スポーツ車ラインオフ式典（太田市の富士重工業群馬製作所）

2012年1月の鉱工業指数（季節調整済み、05年＝基準）の生産指数は114・1で前月比4・3％増加した。特に群馬県経済を牽引する自動車産業が好調だ。産業別生産指数で見ると輸送機器は182・0と、08年秋のリーマンショック前のピーク値をはるかに凌ぐ。

しかし、今は自動車産業を中心に好調を維持していても、先行きを楽観する声は県内でほとんど聞かれない。国内人口の縮小や新興国のキャッチアップなどから、電機産業や自動車産業では生産拠点の海外シフトが着々と進んでいる。先端産業のコモディティー化（汎用品化）の流れも急速で、群馬県の産業界も変化が迫られている。

富士重工業は2月末で50年以上の歴史を持つ軽自動車生産の歴史に終止符を打った。「スバル360」をはじめ、同社は戦後の軽自動車の発展を引っ張ってきた。その軽自動車を生産していた群馬製作所本工場は今、トヨタ自動車と共同開発したスポーツ車「トヨタ86」と「スバルBRZ」の生産工場として生まれ変わった。

同社はダイハツから軽自動車のOEM（相手先ブランド）供給を受けることで、今後も軽の販売自体は続ける。顧客の低価格志向や低燃費などを追い風に、日本の自動車メーカーの多くが軽自動車に力を注ぐ。その中で富士重工業は軽自動車の開発・生産から撤退して、登録車に注力するという判断を下した。同社では北米を中心に販売好調が続く。

また群馬県は11年5月に「次世代産業振興戦略会議」を立ち上げた。「次世代自動車」、「健康・福祉」、「ロボット」、「環境・新エネルギー」、「観光」の5つの部会を設け、企業、大学、金融機関、公設試験場などが参加。〝オール群馬〟体制で新産業の創出に臨む。

これまで各部会で講演会や視察会などを重ねてきたが、4月からは産学連携の活性化を図る。まず大手企業出身の技術者をコーディネーターとして採用する計画で、大学の研究シーズを紹介するイベントなども設ける。

産学連携の重要性が叫ばれるようになって久しいが、「中小企業にとって大学は依然として敷居の高い存在」（工業振興課）であるのが現状という。このような産と学を隔てる壁を取り払うのが一つの狙いだ。

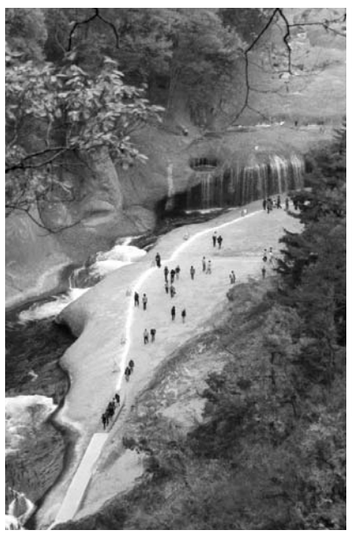
もちろん新産業創出に向け、民間企業も動いている。群馬県のバックアップの下、2月に県内の若手経営者を中心に企業間ネットワークの発展について考えるシンポジウムが開かれた。

若手経営者グループの中心人物の一人、吉田製作所（太田市）の羽柴孝之社長は、「これまでの愚直な生産性改善を得意とする製造業のやり方には限界があるかもしれない」と懸念する。一方、「高い技術を使わなくても、切り口次第で新しいビジネスを切り開けるかもしれない」と考える。

現在、大学の協力を得ながら、医療分野を模索するなどの活動を進めている。この取り組みに参加した荻野製作所（榛東村）の荻野修社長は、「すぐに事業化するのは難しいものの、医療分野にも我々の技術やサービスを生かせる余地が十分にあると分かった」と手応えを感じている。

「産産ネットぐんま交流会で企業発展の道を探る。マイクを握っているのが吉田製作所の羽柴社長。その手前が荻野製作所の荻野社長

モノづくりの伝統を引き継ぎ新たな船出へ



上＝「東洋のナイアガラ」と呼ばれる吹割の滝（沼田市）
右上＝榛名山（高崎市）山頂の榛名湖と榛名富士

交通インフラ整備急ピッチ

物流・観光の利便性向上

2011年3月に群馬、栃木、茨城の北関東3県に「北関東自動車道」が全線開通して1年。群馬県としては観光客の増加や企業誘致などに弾みを付けたいところで、幹線道路の延長や車線拡大など、県内の交通網の整備が急ピッチで進められている。

◇　◇

北関東自動車道の開通前は北関東3県間は互いに近いようで移動に時間がかかった。このような同地域の交通インフラ上の弱点が北関東道によって一挙に解消した。

群馬県内には県を縦断する関越自動車道や長野県へと通じる上信越自動車道、県東部を通る東北自動車道、県道が存在する。北関東自動車道の開通により、これらの自動車道がすべて互いにつながった。これは、北関東、東北、甲信越、都心部へと、群馬県から東西南北へのいずれの方角にも移動しやすくなったことを意味する。

北関東道の全線開通後、群馬県が力を入れているのが県内の幹線道路網の整備だ。目下、前橋市や高崎市、太田市、桐生市などの市街地から高速道路のインターチェンジ（IC）へとつなぐ道路の整備を進めている。

高速道路による利便性をいっそう高める狙いだ。

またここ数年、国道17号や国道354号などの幹線道路で拡張や4車線化が相次いでいる。これにより、県内の都市部間の移動時間が短縮した。例えば、前橋市と高崎市の中心部間の移動は、朝夕に混雑時は1時間ほど要していたが、354号線の一部区間の4車線化により、これらの中心部間を30分以内に移動できるようなった。同様に太田市市街地のアクセス性も4車線化によって改善されている。

観光地への移動時間も短縮される。3月に高崎市から渋川市へのバイパスが整備されたことで、渋川市内の伊香保温泉などへのアクセス性改善が期待される。また沼田市から片品村へと続く、国道120号椎坂バイパスも14年度に完成予定だ。これにより尾瀬高原や同村のスキー場、栃木県日光市へのアクセス性改善が期待できる。

群馬県は震災や台風などの自然災害による被害が少ないとされる。実際、東日本大震災では建物が損壊するなどの直接的な被害はほとんど見られなかった。これは群馬県の強みの一つとなっている。

拡張が進む高崎渋川線バイパス

ただ、茨城県と栃木県の北関東2県は北関東自動車道の全線開通を見据え、工業団地の造成に手を打ってきたのに対し、群馬県では工業団地の造成が遅れている。10年に群馬県は企業立地件数が50件と全国1位に輝いた。一方、敷地面積で見ると41㌶で全国5位と、大規模な立地が少ないのが長年の課題だ。

大規模な企業立地の受け皿となるのは主に工業団地だ。しかし、過去10年間ほど群馬県内で工業団地の造成の動きは鈍かったことが響き、大規模な工業用地の空きに関して、〝弾切れ〟になりつつある。企業が必要としている時期に土地を提供できなければ、せっかくの機会を失いかねない。群馬県は巻き返しに向け、12年度内に工業団地の造成に関する計画を発表する予定だ。

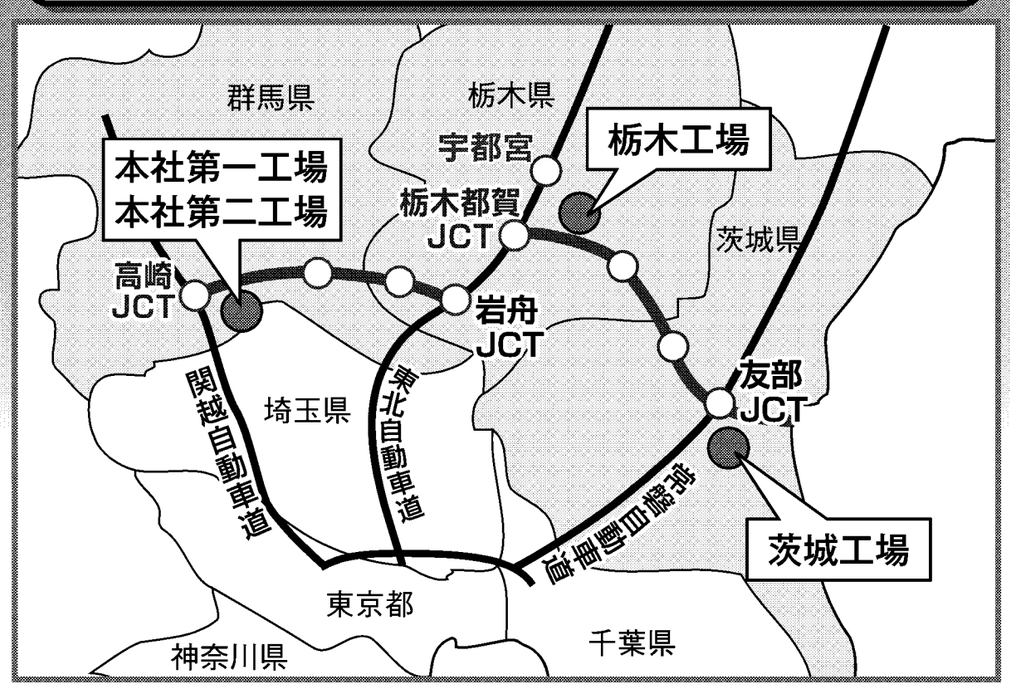
きれいな工場から生み出される確かな品質

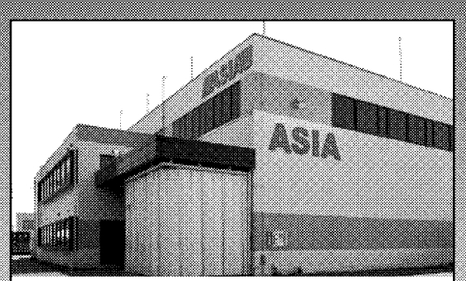
IT管理による確かな納期、話し合いによるお客様本意のコスト

北関東自動車道　全線開通1周年“広がる熱処理ソリューション”

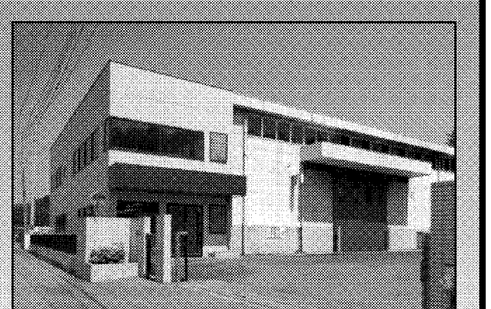
本社工場
〒372-0854
群馬県伊勢崎市飯島町540-2
TEL. 0270-32-6321
FAX. 0270-32-7607

北関東自動車道を結ぶネットワーク





栃木工場
〒322-0603
栃木県上都賀郡西方町大字本郷621-1
TEL. 0282-92-8818
FAX. 0282-92-8817



茨城工場
〒319-0102
茨城県小美玉市西郷地60-1
TEL. 0299-48-3020
FAX. 0299-48-3045

アジア熱処理技研株式会社
URL http://www.asia-ht.co.jp